

## 中世叡尊教団の伯耆・因幡・出雲・石見四国における展開

～国分寺等に注目して～

### The Development of Eizon's Order in Hōki, Inaba, Izumo and Iwami Provinces Focusing on Kokubunji Temples in the Middle Ages

松尾 剛次

MATSUO, Kenji

【キーワード】 叡尊教団・国分寺・道入房  
Key words: Eizon's order kokubunji temples; Dōnyūbo

#### はじめに

ここでは、中世叡尊教団の伯耆国と因幡国と出雲国と石見国、いわば山陰地方における展開を考察する。そのためには明德二（一三九一）年に書き改められた「西大寺末寺帳」（「明德末寺帳」と略記）は重要である。というのも、伯耆国分寺と因幡国分寺と出雲報恩寺と石見正法寺がそれに記されている<sup>①</sup>ように、それらは確実に西大寺末寺であったからだ。そこで、伯耆国分寺、因幡国分寺、出雲報恩寺、石見正法寺の順で考察する。

#### 第一章 伯耆国における展開

伯耆国分寺は、現鳥取県倉吉市国分寺に所在したが、現在は廃寺

である。国府川に臨んだ久米が原台地末端に位置する。伯耆国分寺については、主に古代の国分寺として研究がなされてきた<sup>②</sup>。

ただ『日本歴史地名大系 鳥取県の地名』<sup>③</sup>が以下のように、一五世紀半ばの再建を伝える。

天曆二年（九四八）一二月二八日の太政官符断簡（続左丞抄）によれば、金光明（こんこうみょう）寺（伯耆国分寺）は北側にある法華寺（国分尼寺）内の倉からの出火により焼失したといい、遺構にも火災の跡が確認される。火災後の再建は不明であるが、文明年間（一四六九―一八七）に再建されたともいう（「大谷佐々木家系図」佐々木家文書）。出土遺物などから簡単な仏堂（葉師堂か）があったと思われる。

すなわち、「大谷佐々木家系図」によれば、文明年間（一四六九—八七）に再建されたという。

また、『角川日本地名大辞典 鳥取県』によれば、「現在の護国山国分寺は、寺伝によると、元禄六年に荒廃した国分寺内にあった薬師堂を現在地に移し、曹洞宗に改め、市内和田の定光寺末寺になった」という。すなわち、元禄六（一六九三）年以前には伯耆国分寺は衰頹し西大寺末寺から離脱し、薬師堂のみの寺となっていた。

しかしながら、伯耆国分寺は叡尊教団によって、中世において中興されたのである。この点は、私<sup>⑤</sup>や追塩千尋<sup>⑥</sup>によって指摘されてはいるが、正面きって論じられてこなかったので、ここで注目する。

中世における国分寺・国分尼寺の中興は、蒙古襲来を契機に始まったと考えられてきた。とりわけ、全国の内、一九箇国分の中興が、奈良西大寺と鎌倉極楽寺に委ねられ、実際に中興に成功したと考えられている<sup>⑦</sup>。伯耆国分寺も、それらの一つと考えられている。

史料（一）<sup>⑧</sup>

（前略）

伯耆国 国分寺

明德二年九月廿八日書改之了

史料（一）は、「はじめに」で触れた「明德末寺帳」である。それには、伯耆国分寺が挙がっている。ただ、「明德末寺帳」に記載されている末寺は西大寺から直接住持（長老という）が派遣される僧寺

の直末寺であり<sup>⑨</sup>、伯耆国に国分寺しか西大寺末寺がなかったわけではない点にも注目すべきである。すなわち、他（国分尼寺など）にも末寺があったと推測される。

史料（二）<sup>⑩</sup>

（前略）

四室分

相模国

極楽寺

但馬国

常住金剛寺

大和国

大御輪寺

伊賀国

大岡寺

伯耆国

国分寺

讃岐国

鷲峰寺

（後略）

史料（二）は、永享八（一四三六）年三月日附け「西大寺坊々寄宿末寺帳」の「四室」分である。「西大寺坊々寄宿末寺帳」は毎年奈良西大寺で開催される光明真言会に際し、どの坊に宿泊するかが記されている<sup>⑪</sup>。一五世紀前半において伯耆国分寺は四室に宿泊することになっていたことがわかる。

史料（三）<sup>⑫</sup>

伯耆国

国分寺

史料(三)は、一四五三年から一四五七年にかけて作成された<sup>13)</sup>「西大寺末寺帳」の一部である。すなわち、一五世紀半ばにおいても、伯耆国分寺は西大寺末寺であった。しかし、寛永一〇(一六三三)年三月七日附の末寺帳には見えない<sup>14)</sup>。

さて、中世伯耆国分寺は、いつから律寺となったのであるか。このことを考えるうえで、叡尊教団関係者の物故者名簿と言える「光明真言過去帳」<sup>15)</sup>は重要である。中世伯耆国分寺関係の律僧として、「光明真言過去帳」に最初に見えるのは、道入房である。

#### 史料(四)<sup>16)</sup>

當寺開山長老興正菩薩

理性房 光臺寺

覺法房 佐野寺

照道房 小田原

○日淨房 西琳寺

○雙意房 勝慢院長老

法光房 西谷寺

○圓律房 招提寺長老

道入房 伯耆国分寺

○覺證房 喜光寺

空印房 市原寺

蓮順房 清冷寺

賢明房 極楽寺

※太字ハ松尾

史料(四)は、「光明真言過去帳」である。それによれば、正応五(一二九二)年八月二四日に死去した唐招提寺長老円律房証玄<sup>17)</sup>と、永仁六(一二九八)年七月二四日に死去した賢明房慈濟<sup>18)</sup>との間に伯耆国分寺僧道入房が記載されている。道入房は、その間に死去したのである。また、異論があるが西琳寺日淨房惣持が永仁二(一二九四)年に死去した<sup>19)</sup>とすれば、道入房は一二九二年から一二九

四年の間に死去したことになる。

#### 史料(五)<sup>20)</sup>

(前略) 僧圓天

道実 道入房(後略)

史料(五)は、叡尊から受戒した直弟子のリストを書き上げた「授菩薩戒弟子交名」<sup>21)</sup>の一部で、伯耆国人である道入房道実が挙げられている。史料(四)の道入房というのは、本史料の道入房道実と同一人物であろう。すなわち、「光明真言過去帳」に伯耆国分寺僧として最初に見える道入房は伯耆国出身で叡尊の直弟子であった。この道入房道実が伯耆国分寺中興の祖であった可能性は高いと考える。道入房は故郷の伯耆国に帰って、国分寺の復興に務めたのであろう。以上、道入房道実が伯耆国分寺中興の祖であったとすると、従来、なぞであったいつから伯耆国分寺の律寺化が始まるかに手がかりを得ることになる。

従来は、追塩氏が長門国分寺の事例から一二一〇年が最も早い国分寺律寺化の時期とされてきた<sup>22)</sup>。しかし、伯耆国分寺僧の道入房道実は一三世紀末に死去しており、それ以前に伯耆国分寺は律寺化していたのである。このように、一三世紀末には伯耆国分寺が律寺化していたのは確実である。

道入房道実以降にも、「光明真言過去帳」に仙観房、素妙房、源通房、覺樹房といった伯耆国分寺僧が記載されている。

史料(六)<sup>(23)</sup>

(前略)

浄勇房 常光寺

(中略)

仙観房 伯耆国分寺

(中略)

○當寺第四長老沙門静然

史料(六)によれば、伯耆国分寺の仙観房が、元徳元(二二二九)年一〇月三日附で死去した戒壇院長老了心房<sup>24</sup>と、元弘元(二二三二)年一二月一三日附で死去した西大寺第四長老静然<sup>25</sup>との間に記されている。仙観房は、その間に死去したのであろう。

史料(七)<sup>(26)</sup>

當寺第十八長老沙門深泉

(中略)

覺意房 浄光寺

(中略)

○當寺第十九長老沙門良耀

素妙房 伯耆国分寺

○了心房 戒壇院長老

修念房 弘正寺

史料(八)<sup>(29)</sup>

當寺第廿二長老沙門英如

(中略)

珠覺房 寶光寺

(中略)

○當寺第廿三長老沙門英源

史料(八)によれば、源通房が、應永二(二四一五)年二月二九日に死去した西大寺第二二代長老英如<sup>30</sup>と、應永廿六(二四一九)年十月五日に死去した西大寺第二三代長老英源<sup>31</sup>との間に記載されている。源通房は、その間に死去したのであろう。

史料(九)<sup>(32)</sup>

當寺第廿六長老沙門高海

(中略)

良文房 正法寺

(中略)

○當寺第廿七長老沙門良誓

覺樹房 伯州国分寺

源通房 伯耆国分寺

史料(七)によれば、素妙房が應永二(二二九五)年九月廿五日に寂した西大寺第一八代長老深泉<sup>27</sup>と、應永一一(二四〇四)年二月二五日に死去した西大寺第一九代長老良耀<sup>28</sup>との間に記載されている。素妙房は、その間に死去したのであろう。

史料(九)によれば、覺樹房が、永享八(二四三六)年四月二六日に死去した西大寺第二六代長老高海<sup>33</sup>と、寶徳二(二四五〇)年正月二日に死去した西大寺第二七代長老良誓<sup>34</sup>との間に記載されている。覺樹房は、その間に死去したのであろう。先に触れた一五世紀半ばの西大寺末寺帳からも、伯耆国分寺は一五世紀半ばにおいて西大寺末寺

であったが、「光明真言過去帳」の分析からも、その事はいえる。

ところで、先述のように、伯耆国分寺は文明年間（一四六九〜八七）には再建されたと考えられている。「光明真言過去帳」には覺樹房以後は伯耆国分寺僧が見られないことを考えると、その中興は、律寺としての再興ではなかったのであろうか。後考を期したい。

次に、国分尼寺に関していえば、次の史料が参考になる。

史料（一〇）<sup>35</sup>

光台寺

戒蓮 明覚房 卅七 美濃国生、了善 専念房 卅四 大和国生、  
専真 善覚房 卅三 山城国生、忍恵 覚真房 廿九 山城国生、  
寂信 性観房 廿七 山城国生、円智 道実房 山城国生、明顕  
覚如房 廿四 山城国生、性誉 理教房 廿三 伊勢国生、覚入  
蓮忍房 廿二 伯耆国生、禅覚 蓮願房 廿三 和泉国生、照空  
妙真房 廿二 讃岐国生、浄円 善性房 廿一 山城国生、性基  
覚如房 十八 河内国生、智真 教覚房 十七 大和国生、戒禅  
教静房 十七 和泉国生、善忍 本教房 十七 伊予国生  
已上形同沙弥尼百三十八人

史料（一〇）は、先述した「授菩薩戒交名」の一部で、光台寺に所属する形同沙弥尼に伯耆出身の覚入蓮忍房がいたことがわかる。覚入蓮忍房が伯耆国分尼寺に入ったかどうかは不明だが、伯耆出身の尼がいたことは注目される。

叡尊直弟子で、伯耆出身の道入房道実が国分寺の復興を担ったように、国分尼寺の復興も、同じく叡尊直弟子の伯耆出身覚入蓮忍房が担ったのかもしれない。可能性として指摘しておこう。

以上、中世伯耆国分寺に注目して、律寺化の過程を見てきた。伯耆国分寺は、国分寺の中では早い時期の一三世紀末には律寺化が伯耆国出身の道入房道実によつて始まり、一五世紀半ばまでは律寺として機能していたのである。

## 第二章 因幡国における展開く国分寺に注目して

因幡国分寺は、袋川中流左岸の平地、現鳥取県鳥取市国府町に所在したが、現在は廃寺で、ただ寺号を継ぐ寺院がある。寛政七（一七九五）年に安部恭庵によつて著された『因幡誌（全）』によれば<sup>36</sup>、当時、国分寺は衰退し一草庵となり、その草庵は黄檗宗で、本寺が鳥取興禅寺である最勝山国分寺という、と伝える。すなわち、寛政七年には西大寺末寺ではなかった。

さて、この因幡国分寺についても、古代に関する研究がほとんどである<sup>37</sup>が、私<sup>38</sup>や追塩<sup>39</sup>によつて、中世において、叡尊教団によつて中興された一九国分寺の一つとして考えられている、しかし、詳しい分析がなされたわけではないので、ここで論じておく。

因幡国分寺がいつ律寺化したのかははっきりしない。蒙古襲来を契機とした、叡尊教団による国分寺中興運動に伴う活動であったのだろうとはいえる。

次の史料をみよう。

史料(一一)(40)

因幡国

国分寺

史料(一一)は、先述した明徳二(一二三九)年に書き改められた「明徳末寺帳」の因幡国分である。すなわち、因幡国分寺は明徳二年頃には西大寺直末寺であった。

史料(一一)(41)

護国院分

伊勢国

弘正寺

同

長妙寺

當国

現光寺

同

迎撰寺

同ヤヲキ

金剛蓮花寺

丹後国

国分寺

史料(一二)は、永享八(二四三六)年三月日附け「西大寺坊々

寄宿末寺帳」の「護国院」分である。先述のように、「西大寺坊々寄宿末寺帳」は毎年奈良西大寺で開催される光明真言会に際し、どの坊に宿泊するかが記されている。一五世紀前半において因幡国分寺は西大寺護国院に宿泊することになっていたことがわかる。

史料(一三)(42)

因幡國

國分寺

史料(一三)は、一四五三年から一四五七年にかけて作成された<sup>43)</sup>「西大寺末寺帳」の一部である。すなわち、一五世紀半ばにおいても、因幡国分寺は西大寺末寺であった。しかし、寛永一〇(一六三三)年三月七日附の末寺帳には見えない<sup>44)</sup>。すなわち、一七世紀前半には確実に西大寺末寺を離脱していた。

また、因幡国分寺僧の存在も先に触れた叡尊教団関係者の物故者名簿と言える「光明真言過去帳」によって知られる。

史料(一四)(45)

當寺第十五長老沙門興泉

(中略)

蓬覺房 額安寺

(中略)

戒智房 因幡国分寺

○當寺第十六長老沙門禅譽

史料(一四)は、「光明真言過去帳」の一部である。それによれば、因幡国分寺戒智房が、康暦元(一三三九)年六月晦日に死去した西大寺第一五代長老興泉<sup>46)</sup>と、嘉慶二(一三八八)五月五日に死去した西大寺第一六代長老禅譽<sup>47)</sup>との間に記載されている。戒智房は、その間に死去したのであろう。

史料(一五)<sup>48)</sup>

當寺第廿八長老沙門元澄

(中略)

印順房 菩提寺

昌熙房 因幡國分寺

(中略)

○當寺第廿九長老沙門高筭

史料(一五)も、「光明真言過去帳」の一部である。それによれば、因幡国分寺昌熙房が長祿元(一四五七)年一月八日に死去した西大寺第二八代長老元澄<sup>49)</sup>と、文明三(一四七一)十二月二日死去した西大寺第二九代長老高筭<sup>50)</sup>との間に記載されている。昌熙房はその間に死去したのであろう。

従来、因幡国分寺が律寺として、いつまで機能したのかはつきりしなかったが、一五世紀半までは律寺として機能していたのである。さて、因幡国分寺がいつ律寺化したのかははつきりしない。しかし、次の史料(一六)のような興味ぶかい史料がある。

史料(一六)<sup>51)</sup>

廿三日、一条局進私領六ヶ所尽未来際殺生禁断状、因幡国古海郷、同国福井并伏野保、美濃国時并多羅山、常陸国塩橋村等也、至于後代、相伝之仁、可守此旨之由、有契状、発心之趣、随喜尤深、

史料(一六)は、叡尊の鎌倉下向の記録である「関東往還記」の弘長二(一二六二)年六月二三日条である。それによれば、一条局が私領の六所を殺生禁断の地にする状を叡尊に提出している。その内に、因幡国古市郷(鳥取市古海)、福井(鳥取市福井)、伏野保(鳥取市伏野)が入っている。それゆえ、それが叡尊教団が因幡国へ進出する契機となったのかもしれない。

ところで、中世因幡国分尼寺については、史料がほとんどないが、次の史料は示唆に富んでいる。

史料(一七)<sup>52)</sup>

法華寺現在形同

性忍 見智房 六十七 山城国生、春信 円順房 五十一 大和国生、戒念 念法房 五十 因幡国生、

史料(一七)は、先に触れた「授菩薩戒弟子交名」の一部分である。それによれば、法花寺の形同沙弥尼として因幡出身で五〇歳の念法房戒念がいたことがわかる。

念法房戒念のような因幡国出身者が因幡国分尼寺の中興を担った可能性がある。

### 第三章 叡尊教団の出雲国における展開

二〇〇九年三月六日、JR山陰線玉造温泉駅で降り、タクシーで報恩寺（現在、島根県松江市湯町玉湯町五六七番に所在する）に向かった。私が、報恩寺に関心をもったのは、報恩寺が中世出雲国で唯一の西大寺末寺であったからだ。しかし、残念なことにその事実は、従来、全く知られていない。それゆえ、西大寺末寺としての報恩寺に関する研究は皆無である。『島根県の地名』<sup>53</sup>などでも全く触れられていない。そこで、ここに論じる次第である。

#### 第一節 西大寺末寺としての報恩寺

まず、報恩寺が奈良西大寺の直末寺であったことを示そう。

史料（一八）<sup>54</sup>

出雲国

報恩寺

史料（一九）<sup>55</sup>

出雲国

報恩寺

史料（一八）は、明德二（一三九二）年に書き改められたという

「明德末寺帳」の「出雲国」分である。それによれば、出雲国の「湯」

の報恩寺が西大寺末寺であったことがわかる。本末寺帳には、奈良西大寺から任職が直接任命される寺院、すなわち、直末寺が記されている<sup>56</sup>。それゆえ、報恩寺は、一四世紀末において、西大寺直末寺であった。

史料（一九）は、一四五三年から一四五七年にかけて作成された西大寺末寺帳の出雲国分である。史料（一九）から、報恩寺は一五世紀半ばにおいても西大寺末寺であったと考えられる。

次に、この「湯」の報恩寺が、どこにあったかが問題となる。その手がかりとなるのは、「明德末寺帳」の報恩寺に付された「湯」という注記である。そこで、「湯」を手がかりに探すと、松江市湯町（旧湯村）にある報恩寺に行き当たると、報恩寺は、現在、真言宗大覚寺末寺で西大寺末寺であったという伝承はまったくない。

『島根県の地名』<sup>57</sup>の記事を引用する。

宍道湖を見下ろす高台にある。養龍山と号し、高野山真言宗。本尊は十一面観音。「雲陽誌」によると、弘法大師の開基と伝え、尼子経久から堀尾吉晴・同忠氏・同忠晴まで代々の祈願所であった。また山内には大昌（だいしよう）寺など七つの末寺があったとされる。とくに堀尾氏の崇敬が厚く、慶長六年（一六〇二）居屋敷、門前二カ所の畑、山林竹木を寄進している（堀尾氏寺領寄進状「報恩寺文書」。本尊は木造立像。高さ四・二六メートルの丈六仏で、長谷寺式の大作。樺材と松材の寄木造。天冠台上地髪部に一一面を配し、左手に水瓶、右手には錫杖をもつ。衣文は貞観様式の大ぶりなつくりになっている。昭和五六年（一九八一）の大修理で首および足に墨書が発見され、天文七年



(一五三八)、運慶の子孫で京都七条(しちじょう)の大仏師式部卿の子康運の作であることが判明した。

以上、ようするに報恩寺は、養龍山報恩寺といい、弘法大師開基の伝承を有する古代以来の由緒ある寺院である。かつては、十二坊の塔頭があったといわれるほど大いに栄えた。それゆえ、この湯町報恩寺が、「西大寺末寺帳」に見える「湯」の報恩寺と考えられる。報恩寺は、「湯」と注記されるように、玉造温泉に近接し、宍道湖の湖畔の高台にたっている。この地には、温泉があったばかりか、向市という市場があり、大いに栄えていた都市的な場であったという。また、報恩寺の裏山には報恩寺古墳があり、古代以来の聖なる場であった。

ところで、報恩寺には、丈六(約四、二三メートル)の十一面観音が残っている。巨大な十一面観音立像であり、長谷寺の観音と同木と言われる。しかし、修理の際、胎内銘があり、一五三八年制作で、京都の仏師康運の作であったことがわかったという。

このように、古代・中世を通じてひとまず存在が確認できる寺院であり、戦国時代・江戸時代にも、尼子、堀尾氏の保護を受けた。松江城下の南西の裏鬼門を守る寺院と位置づけられ、保護されていたという(以上は、報恩寺に伝来した「報恩寺文書」による)。また、江戸時代には、京都大覚寺末寺であった。

以上のようなことから、「明德末寺帳」に見える「報恩寺」とは、湯町報恩寺のことと考える。

この報恩寺を誰が律寺として誰が中興したのかについては史料が



ないので、つきりしない。しかし、叡尊から受戒した弟子達の名簿である「授菩薩戒弟子交名」によれば、「出雲国人 順然 覚心房<sup>58)</sup>」、「出雲国人 栄円 智月房<sup>59)</sup>」、「唯覚 戒円房 廿八 出雲国生<sup>60)</sup>」といった出雲国出身者がいる。史料がないので、つきりしないが、彼らのような出雲出身者が、報恩寺の律寺化に貢献したのかもしれない。

## 第二節 伝大野次郎左衛門五輪塔について

ところで、湯町報恩寺が、西大寺直末寺であったとすると、いろいろと出雲地域の謎が解けてくる。その一例として、出雲地域に出現した巨大五輪塔がある。すなわち、出雲地域にも、二・五メートルを超える、来待石という凝灰岩製の巨大五輪塔が突然出現しているが、その制作主体については謎が多い。とくに、報恩寺のある玉造の西、上来待ある伝大野次郎左衛門の墓という伝承のある二・五

メートルもの巨大五輪塔は謎に満ちている。以下、伝大野次郎左衛門五輪塔という。

この伝大野次郎左衛門五輪塔は、現在の県立わかたけ学園校庭のわずれの台地にぼつんと立っている。土御門天皇の墓と伝えるが、研究者の間では戦国時代の領主であった大野次郎左衛門の墓と推測されている<sup>61</sup>。しかし、何ら根拠があるわけではない。

ところで、中世の律宗教団が、五輪塔を初めとする石造遺物を多数作り上げていったことは、周知のごとくである。とくに、鎌倉時代の後期から南北朝期にかけて多数の二メートルを超える巨大五輪塔を建造していった。

それゆえ、この伝大野次郎左衛門五輪塔も、報恩寺あるいはその末寺が、建立の主体ではなかったかと考えられる。とくに、来待と玉造は、隣接しており、報恩寺（その末寺）こそ、巨大五輪塔を出雲地域に持ち込んだ主体と考えたい。



伝大野次郎左衛門五輪塔

ただ、律宗の五輪塔は、関東は安山岩、関西は花崗岩が多いが、来待は来待石の産地であったために、凝灰岩を使ったと推測する。

#### 第四章 石見国における展開

叡尊教団は石見国においても展開していた。明徳二（一三九一）年に書き改められた「明徳末寺帳」には、石見国正法寺が西大寺直末寺として挙がっている。正法寺は、現在の島根県浜田市三隅町に所在する高野山真言宗の寺院である。そこで、現地調査を踏まえ<sup>62</sup>、以下に論じる。

この石見正法寺については、元興寺文化財研究所『平成二年度 中世民衆寺院の研究調査報告書Ⅱ』<sup>63</sup>が、現地調査を行い、資料収集を踏まえた正法寺研究の到達点ともいえるべき研究成果である。

また、『島根県の地名』が正法寺の歴史について簡潔にまとめている。それによれば「高野山真言宗正法寺は天平九年（七三七）行基草創の霊場と伝えられ、建仁二年（一一〇二）藤原国兼が再興、三隅兼信が菩提寺としたという。明徳二年（一三九一）九月二八日の西大寺末寺帳（極楽寺文書）に「三角 正法寺」とみえる。」<sup>64</sup>『三隅町誌』<sup>65</sup>によれば、元龜元（一五七〇）年に毛利氏によって三隅氏による高城城落城に際し、兵火を蒙り、堂塔伽藍一切灰燼に帰した。三隅家没落の後天正年間（一五七三〜九三）、益田兼家の助力を得て尊慶法印が勧進造営の事にあたったという。ここでは、それらを参照しつつ、以下、私見を加えよう。

史料(二〇)(66)

石見国

三角  
正法寺 大慈

史料(二〇)は、「明德末寺帳」の石見国分である。それによれば、一四世紀末期には石見国三角正法寺が西大寺直末寺であったことがわかる。三角は三隅のことである。注記の大慈院とは、光明真言会に際して、石見国正法寺僧が西大寺の大慈院に宿泊することになっていたことを表している。

史料(二一)(67)

大慈院分(乗を消して慈とあり)

河内  
西琳寺

同方歳  
最福寺

河内  
千光寺

當国高尾  
神願寺

同  
福林寺

當国  
大安寺

紀伊国ス夕  
利生護国寺

同  
寛弘寺

紀伊国  
宝光寺

伊賀国  
七仏薬師院

越前国  
神宮護国寺

越中  
聖林寺

長門  
長光寺

越前  
大善寺

石見国  
正法寺

史料(二一)は、永享八(一四三六)年三月日付「坊々寄宿末寺帳」の大慈院の部分である。それによれば、石見国正法寺が、永享八年においても奈良西大寺で開催される光明真言会に参加し、その際は大慈院に宿泊することになっていたことがわかる。すなわち、一五世紀の前半においても正法寺は叡尊教団に属していたのである。

史料(二二)(68)

石見国  
正法寺

史料(二二)は、一四五三年から一四五七年にかけて作成された「西大寺末寺帳」の一部である。石見正法寺がそれに見える。すなわち、一五世紀半ばにおいても、石見正法寺は西大寺末寺であった。

○當寺第廿五長老沙門榮秀  
順覺房 長妙寺

心淨房 石州正法寺

(中略)

○當寺第廿六長老沙門高海

史料(二三)は、「光明真言過去帳」の一部である。それによれば、石見正法寺の心淨房という僧が、永享二(二四三〇)年八月二日に亡くなった<sup>74</sup>。西大寺第二五長老沙門榮秀と、永享八(二四三六)年四月二六日に死去した<sup>75</sup>。西大寺第二六長老沙門高海との間に記載されている。心淨房は、その間に死亡したのであろう。とすれば、一五世紀前半にも正法寺は西大寺末寺として、住僧もいたのである。

史料(二四)<sup>73</sup>

○當寺第三十長老沙門仙恵

聰泉房	石州正法寺	琳光房	西琳寺
本了房	小塔院	堯珠房	幡州常住寺
順如房	般若寺	高順房	江州長安寺
眞照房	金剛蓮花寺	文地房	肥後淨光寺
永圓房	淨住寺	眞岡房	石州正法寺

(中略)

○聖圓房 招提寺長老

良舜房○ 現光寺

史料(二四)も「光明真言過去帳」の一部である。それによれば、石見正法寺の聰泉房と眞岡房という僧が、文明一〇(一四七八)年八月六日に亡くなった<sup>76</sup>。西大寺第三〇代長老沙門仙恵と、文明一八(二四八六)年五月一日に死去した<sup>77</sup>。招提寺長老聖圓房良恵との間に記されている。聰泉房と眞岡房は、その間に亡くなったのである。とすれば、正法寺には一五世紀の後半においても叡尊教団の住

僧がいたことは明らかであろう。

しかし、寛永一〇(一六三三)年三月七日附の末寺帳には見えない<sup>78</sup>。すなわち、一七世紀前半には確実に西大寺末寺を離脱していた。

ところで、正法寺は三隅氏の菩提寺であった。そこで、注目されるのは、三隅氏が海上交通、舟運に関係する武士団であったという事である。中世以来、三隅津は大いに栄えたという<sup>79</sup>。また、鎌倉極楽寺による和賀津の管理を初め、中世叡尊教団は港湾の管理を任された。とすれば、正法寺は三隅津の管理を任されていたかもしれない。

また、正法寺の役割、とりわけ葬送従事に関して注目されるのは、二つの五輪塔である<sup>80</sup>。一つは、境内の伝三隅兼連五輪塔であり、いま一つは伝三隅悪五郎五輪塔である。いずれも西大寺様式の五輪塔である。伝三隅兼連墓という。総高一八cm。別称東向の墓ともいう。三隅城主四代兼連は、南北朝期にあつて終始南朝に忠誠を尽くし、正平一〇(一三五五)年京都において北朝軍軍との戦いで戦死した。墓を東都へ向けて築けと遺言したという。たほう、伝三隅悪五郎五輪塔は、総高一七二cm。元亀元(一五七〇)年三隅城落城の際、戦死した三隅悪五郎国定の墓と伝えられるが<sup>81</sup>、鎌倉時代末期のものと考えられる<sup>82</sup>。



### おわりに

以上、伯耆国・因幡国・出雲国・石見国に注目して中世叡尊教団の展開を論じてみた。伯耆国・因幡国は、各々の国分寺が西大寺直末寺であり、山陰地方の国分寺の中世的展開を理解する事例といえる。とりわけ、一三世紀末以前という、史料的には比較的早い時期における、伯耆出身の道入房道実による伯耆国分寺の律寺化を明らかにできた点は重要である。

蒙古襲来退散祈禱を契機として、諸国一宮・国分寺の中興が国策となり、一九箇国の国分寺が奈良西大寺と鎌倉極楽寺に委ねられた

が、おそらく、伯耆国分寺のように、その内のいくつかの国分寺には叡尊・忍性らによって、それ以前に弟子が派遣され、律寺化が始まっていたのであろう。

ところで、従来は、国分寺と叡尊教団との関係といえば、一五世紀以降において関係を維持していたのは伊与、周防、長門の三國分寺のみと考えられてきた<sup>80</sup>。しかし、これらの他にも、伯耆・因幡国分寺は確実に西大寺末寺であった。その他、尾張国分寺、加賀国分寺、越中国分寺、丹後国分寺、讃岐国分寺、陸奥国分寺の国分寺も西大寺末寺であった<sup>82</sup>。それゆえ、諸国国分寺の六分の一が西大寺末寺として一五世紀半ばにおいても機能していたことは明らかである。

また、従来、中世に叡尊教団によって復興された国分寺の独自の機能については、等閑に付されてきた。それは史料が少ないことによる。しかし、奈良西大寺の光明真言会に毎年参加していた国分寺の律僧たちが、地元の伯耆・因幡国分寺において、ミニ光明真言会を開いていたと考えるのが自然であろう。国分寺ではない西大寺末寺の律寺では、光明真言会を開いていたと考えられている<sup>83</sup>。また、中世における再興後の国分寺では葬送従事など古代の国分寺僧ができなかつたことを行っていたはずである<sup>84</sup>。

さらに、出雲国においては、湯の報恩寺という西大寺直末寺の存在を明らかにしたうえで、伝大野次郎左衛門墓所の造立主体に、報恩寺あるいはその末寺を推測した。文献史料が少なく、明確に論じがたいが、明德二（一三九二）年の「明德末寺帳」に見える「湯報恩寺」とは湯町報恩寺であつたはずであり、中世出雲における西

大寺末寺の存在が初めて明らかになったと考える。それにしても、報恩寺も市場の近くで、湖岸という交通の要衝で、温泉と玉造という人が集まる都市的な場に立つなど、他の律寺と同じような立地であったことにも注目しておこう。

石見国は、三隅正法寺に注目して叡尊教団の展開を見た。正法寺も西大寺末寺として一五世紀半ばにおいても機能していた。また、三隅津管理との関係も何われ、五輪塔の存在から葬送従事についても言えるであろう。

注

- (1) 松尾剛次「西大寺末寺帳考」(『勸進と破戒の中世史』吉川弘文館一九九五)一五三頁。
- (2) 『新修国分寺の研究 第七巻補遺』(吉川弘文館、一九九七)、『新編倉吉市史 第一巻古代編』(倉吉市、一九九五)、『伯耆国分寺』(倉吉博物館、一九八三)など参照。
- (3) 『日本歴史地名大系 鳥取県の地名』(平凡社、一九九五)五七六頁。それは、『鳥取県文化財調査報告書 第一二集』(鳥取県教育委員会一九七九)四頁が元ネタであろう。なお、二〇一七年に現地調査を行ったが、大谷佐々木家文書の系図を見ることができなかった。
- (4) 『角川日本地名大辞典 鳥取県』(角川書店、一九八二)三三七頁。
- (5) 松尾「勸進の体制化と中世律僧」(『勸進と破戒の中世史』前注(1) 二八頁)。
- (6) 追塩千尋『国分寺の中世的展開』(吉川弘文館、一九九六)二一八頁。
- (7) 松尾「勸進の体制化と中世律僧」(『勸進と破戒の中世史』前注(1) 二七・二八頁)。
- (8) 松尾「西大寺末寺帳考」(『勸進と破戒の中世史』前注(1) 一五三頁)。
- (9) 松尾「西大寺末寺帳考」(『勸進と破戒の中世史』前注(1) 一

三六頁。

(10) 松尾「西大寺末寺帳考」(『勸進と破戒の中世史』前注(1) 一五七頁)。

(11) 松尾「西大寺末寺帳考」(『勸進と破戒の中世史』前注(1) 六一頁)。

(12) 松尾「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開」(松尾著『中世叡尊教団の全国的展開』法藏館、二〇一七)三五八頁。

(13) 松尾「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開」(前注(12) 三五八頁)。

(14) 「西大寺末寺帳 その3」(『西大寺関係史料(二) 諸縁起・衆首交名・末寺帳』、奈良国立文化財研究所、一九六八)一〇頁など参照。

(15) 本「光明真言過去帳」については松尾「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」(速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館、二〇〇六)を参照。

(16) 松尾「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」(前注(15) 一頁)。

(17) 『律苑僧宝伝』(『大日本仏教全書一〇五』(名著普及会、一九七九)一四一頁)。

(18) 奈良国立博物館編『大和額安寺鎌倉極楽寺五輪塔の納入品』(天理時報社、一九八六)一二頁。

(19) 松尾「中世叡尊教団の全国的展開」(前注(12) 九二頁)。

(20) 松尾「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」(松尾著『日本中世の禅と律』吉川弘文館、二〇〇三)七五頁。

(21) 松尾「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」」(前注(20) 参照)。

(22) 追塩千尋『国分寺の中世的展開』(前注(6) 一八七頁)。

(23) 松尾「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」(前注(15) 八七頁)。

(24) 「招提千歳伝記」『大日本仏教全書一〇五』(前注(17) 五五頁)。

(25) 「西大寺代々長老名」(『西大寺関係史料(二) 諸縁起・衆首交名・末寺帳』(前注(14) 七三頁)。

(26) 松尾「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」(前注(15) 一〇〇頁)。

(27) 「西大寺代々長老名」(前注(14) 七三頁)。

- (28) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七三頁。
- (29) 松尾 「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」 〆前注 (15) 〆一〇四頁。
- (30) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七三頁。
- (31) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七三頁。
- (32) 松尾 「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」 〆前注 (15) 〆一〇七頁。
- (33) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七三頁。
- (34) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七三頁。
- (35) 松尾 「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」 〆前注 (20) 〆一〇六頁。
- (36) 安部恭庵 『因幡誌 (全三)』 (世界聖典刊行協会、一九七八) 一三八頁。
- (37) 『新修国分寺の研究 第四卷』 (吉川弘文館、一九九一)。
- (38) 松尾 「勸進の体制化と中世律僧」 (勸進と破戒の中世史) 〆前注 (1) 〆二七・二八頁。なお、大久保宗一 『因幡国分寺の今昔』 (大久保宗一、一九九一) は国分寺の現状を知るうえで参考になる。
- (39) 追塩 「国分寺の中世的展開」 〆前注 (6) 〆二三八頁。
- (40) 松尾 「西大寺末寺帳考」 (勸進と破戒の中世史) 〆前注 (1) 〆一五二頁。
- (41) 松尾 「西大寺末寺帳考」 (勸進と破戒の中世史) 〆前注 (1) 〆一六〇頁。
- (42) 松尾 「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開」 〆前注 (12) 〆三五七頁。
- (43) 松尾 「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開」 〆前注 (12) 〆三五八頁。
- (44) 「西大寺末寺帳 その3」 〆前注 (14) 〆一一〇頁など参照。
- (45) 松尾 「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」 〆前注 (15) 〆九七頁。
- (46) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七三頁。
- (47) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七三頁。
- (48) 松尾 「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」 〆前注 (15) 〆一〇九頁。
- (49) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七四頁。
- (50) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七四頁。
- (51) 性海 『関東往還記』 (細川涼一校注、平凡社、二〇一一) 一九三頁。
- (52) 松尾 「西大寺叡尊像に納入された「授菩薩戒交名」と「近住男女交名」 〆前注 (20) 〆一〇三頁。
- (53) 『島根県の地名』 (平凡社、一九九五) など。
- (54) 松尾 「勸進と破戒の中世史」 〆前注 (1) 〆一五〇頁。
- (55) 松尾 「中世叡尊教団の全国的展開」 〆前注 (12) 〆三五六頁。
- (56) 松尾 「勸進と破戒の中世史」 〆前注 (1) 〆一三六頁。
- (57) 『島根県の地名』 〆前注 (53) 〆一四三・一四四頁。なお、小野澤真 『西大寺末寺帳』 (寺院比定試案) (『寺社と民衆』七、二〇一一) も報恩寺を当寺に比定する。
- (58) 松尾 「日本中世の禪と律」 〆前注 (20) 〆七二頁。
- (59) 松尾 「日本中世の禪と律」 〆前注 (20) 〆七三頁。
- (60) 松尾 「日本中世の禪と律」 〆前注 (20) 〆一〇五頁。
- (61) 樋口英行 『宍道町ふるさと文庫19 白粉石・来待石の宝篋印塔・五輪塔』 (宍道町菟古館、二〇〇四) 三九頁。
- (62) 平成二九 (二〇一七) 年九月九日に正法寺を訪問し、御住職高原法明氏の〆ご指示を得た。
- (63) 元興寺文化財研究所 『平成二年度 中世民衆寺院の研究調査報告書 II』 (元興寺文化財研究所、一九九一)。三隅町誌編さん委員会 『三隅町誌』 (三隅町、一九七二) などにも参考になる。
- (64) 『島根県の地名』 〆前注 (53) 〆六三八頁。
- (65) 『三隅町誌』 〆前注 (63) 〆一一七四頁。
- (66) 松尾 「西大寺末寺帳考」 (勸進と破戒の中世史) 〆前注 (1) 〆一四九頁。
- (67) 松尾 「西大寺末寺帳考」 (勸進と破戒の中世史) 〆前注 (1) 〆一六〇頁。
- (68) 松尾 「中世叡尊教団の全国的展開」 〆前注 (12) 〆三六五頁。
- (69) 松尾 「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開」 〆前注 (12) 〆三五八頁。
- (70) 松尾 「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」 〆前注 (15) 〆一〇六頁。
- (71) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七四頁。
- (72) 「西大寺代々長老名」 〆前注 (14) 〆七四頁。

- (73) 松尾「西大寺光明真言過去帳の紹介と分析」△前注(15)▽一一〇頁。  
 (74) 「西大寺代々長老名」△前注(14)▽七四頁。  
 (75) 「招提千歳伝記」『大日本仏教全書一〇五』(△前注(17)▽) 八七頁。  
 (76) 「西大寺末寺帳 その3」△前注(14)▽一二〇頁など参照。  
 (77) 『三隅町誌』△前注(63)▽。  
 (78) 『三隅町の文化財』(三隅町教育委員会、一九九三) 二頁。  
 (79) 『三隅町の文化財』△前注(78)▽二頁。  
 (80) 元興寺文化財研究所『平成二年度 中世民衆寺院の研究調査報告書 II』△前注(63)▽一八〇頁。  
 (81) 追塩『国分寺の中世的展開』△前注(6)▽二三八頁。  
 (82) 松尾『中世叡尊教団の全国的展開』△前注(12)▽所収の一四五三年から一四五七年にかけて作成された末寺帳参照。また、丹波金光明寺も丹波国分寺のことであろう。  
 (83) 『新修大阪市史第二巻』(大阪市、一九八八) 二四八頁。  
 (84) 松尾「勸進の体制化と中世律僧」(『勸進と破戒の中世史』△前注(1)▽四九頁など)で、丹後国分寺を例に国分寺の葬送従事についてみた。

付記

本稿は、科学研究費基盤研究(C)「中世叡尊教団の全国的展開」(代表松尾剛次)、同「親鸞理解の変遷についての総合的研究」(代表藤井淳、松尾は分担者)を使った研究成果である。